

[書評]

柴田 武著 『語彙論の方法』

室 山 敏 昭

日本の言語学界、国語学界において、著者が果たしてきた役割の大きさと研究業績の射程の広さは、衆目の一致するところであろう。その広い業績の中にあつて、重要な柱の一つとして定位されるものに、語彙論に関する研究がある。評者もつねづね、その恩恵に浴し、また、著者の巧みな挑発に乗せられもしたひとりである。

さて、本書の「あとがき」を見ると、「先生の古稀を記念して、先生のご研究の大きな柱である語彙論に関する論考をまとめて一本としたものである。」とある。これによって、本書の成立事情は明らかであるが、「語彙論」の内容上の特色は、「あとがき」の全文を読んでも理解できない。しかし、その後に付された「柴田武先生の語彙論研究に関する文献目録」の最初に記されている、著者の文章を引用すると、「ここには、随想の類も含めて、語彙論に関する著作を集めた。ここで語彙論というのは、語彙体系論のことである。」と記されている。これによって、「語彙論」の内容上の特色が理解できる。本書『語彙論の方法』の「語彙論」には、そのような限定が最初から加えられていることを、我々はよく理解しなくてはならない。

本書の構成は、次の通りである。

1

言語における意味の体系と構造
ことばにおける構造とは何か
私の意味論——意味をどうとらえるか——
現代語の語彙体系
言語から見た「食」

2

語彙研究と方言語彙
語彙研究の方法と琉球宮古語彙
沖縄宮古語の語彙体系
沖縄宮古島方言の風と雨
沖縄宮古島方言の生活時間語彙
沖縄宮古島方言の人名語彙
与那国方言における兄弟姉妹の呼称

3

語彙体系としての親族名称——トルコ語・朝鮮語・日本語

世界の中の日本語

第一部は、主に現代共通語を対象として、意味体系・語彙体系に関する著者の基本的な考え方や分析方法を述べ、それに基づいて、色彩語彙・コソアド体系・親族語彙・食語彙などについて具体的な構造分析を行ったもので、従来の方法論や実践例の不備を正し、明晰に自論を展開している。ただ、システムは見事に解明されているが、その背後に人が見えてこない立論となっている。また、最初に置かれた二篇の論考は、本書全体の導入の役割を果たすものであって、語彙体系論にとどまらず、言語における体系と構造の問題が広く論じられている。第二部は、語彙研究の方法とその基本的な問題点に関して、著者の考え方を詳細に述べたものをまず配し、次いで、沖縄方言の語彙を対象とする体系分析の実践例が並ぶ。第二部は第一部とは異なって、沖縄宮古島方言の語彙を中心に、詳しい記述と体系分析を行っているため、語彙体系とコミュニティの社会的構造や人々の生活形態との関連、あるいは事物に対する人々の認識などとの関わりが、かなり鮮明に浮かび上がっている。第三部は、親族語彙について外国語との比較対照研究を行い、さらに、日本語の語彙の特色の一端に触れたものを配して本書を締め括っている。全体に、行論が論理的かつ明晰で、ためらいのない明確な断定が、特に印象に残る。以上が、本書の概要のきわめて粗い紹介である。

以下、本書の全体にわたって、特徴を詳しく記し、評者が問題と感じたところを偏りなく述べるべきであろうが、紙数も限られていることゆえ、おのずからいくつかの問題に絞らざるを得ない。本書の内容上の特徴はいろいろ指摘し得るが、本書を通読して、評者が最も強く感じた疑問に思ったことは、著者の「語彙体系論」におけるあまりの「音形（語形・形態素）」重視の思想である。冒頭論文「言語における意味の体系と構造」において、著者は、「意味の体系を貫く軸」として、「対立」と「並立」という二つの概念を提示しているが、この場合においてさえ、「意味の上でも対立し、（音韻）形の上でも対立（あるいは並立）する」というように、「形の上での対立（あるいは並立）」を重視する。この思想は、本書の全体に一貫して通底していると言ってよい。著者の「音形」重視の考え方を端的に示すのは、「語彙研究と方言語彙」の中の次の一文である。「語彙は、意味と音形とがかかわりあう言語記号を扱わなければならない。」(p. 117) また、その2頁後には、「語彙体系を支えている諸関係は、次のいずれかを共有または非共有することによって成立していることになる。①意味 ②音形 ③意味と音形（形態素）」と述べられている。これと同様の趣旨のことは、p. 68、141にも見られる。さらに、p. 72においては音形だけにとどまらずアクセントまでもが問題とされている。このように、「音形の対立と並立」を重視する著者は、「沖縄宮古語の語彙体系」において、「病気語彙」の体系は認めるが、「薬語彙」には全体にわたって音形の対立が明確に見出せない（一部には明確に認められる、評者）という理由によって、体系を認めようとしなない。語彙が語を要素として構成されるものであ

り、語が意義素と形態素との結合体であることは自明であるから、「語彙体系の具体的なつくり方」(p.120)を考える場合、「音形」を全く無視することが出来ないのは至極当然のことである。「カタガラヤム(偏頭痛)、パタヤム(腹痛)、チュラガサ(天然痘)、スーガサ(はしか)・・・」のように、二つ(以上)の形態素からなる語の場合は「ヤム」「ガサ」などの音形の共有に注目して語彙を分類することは有効な方法であり、また、意義素と形態素との結合は必然的である。しかしながら、単純語の場合はどうなるのであろうか。「言語から見た『食』」の中の加熱調理操作語彙の最も基本的な「ヤク・ニル・アゲル・ムス」の四語がつくる体系には、何ら音形上の共通点は認められない。しかも、著者自身、「意味の共通点と音形の共通点との関係も、意味の相違点と音形の相違点との関係も、ともに必然的なものではない。」(p.73)と明確に述べている。

著者の「音形」重視に関して、さらに疑問視されることは、語彙体系を支えている諸関係の中に、意味とは独立した形で、「音形」の共有または非共有を挙げている点である。はたして、「音形」のみで「語彙体系をつくりあげる」ことが出来るのであろうか。評者は、「意味」の対立関係が認められることが前提となって、はじめて「音形」の対立関係が見えてくるのではないかと考える。先に挙げた「カタガラヤム、チュラガサ」などにおいても、「ヤム」「ガサ」は、語彙をグルーピングするための基本的な意義素と形態素との結合体であって、単なる音形ではない。また、日本語の色彩語彙について、p.81から86にかけて展開されている、音形、熟合、派生関係の分析は見事と言うほかないが、これらはすべて、「アカ・アオ・シロ・クロ」の四語が、日本語の基本的な色彩語彙であるという認識の上に立ってのいわば検証である。しかも、音形については単純に対立ということが言えるかどうか疑問であり、特に熟合は「意味」の一部を共有することによって成立し得るわけで、「音形」だけによってこの四語が、日本語の基本的な色彩語彙の体系を形成していることを証明するのは、ほとんど不可能に近いと言ってよいのではなかろうか。さらに、「音形」を共有する場合として、著者は、「同音語・類音語」(p.119)をその例として挙げているが、この場合こそ「意味」の対立が最も重視されなければならないはずである。

したがって、語彙体系を支えている諸関係は、「①意味 ②意味と音形」の二つの共有または非共有を認めるだけでよい。そのことは、著者の次のような説明にも明らかなのではあるまいか。「語彙体系を支えている諸関係は、体系の要素すなわち語が何かを共有した上で、互いに差異の点で張り合う対立関係である。ムスメとムスコは、『子』である点が共有される『何か』に当たり、『女性』と『男性』の差異が対立をつくっている。」(p.119)ここでは、著者も説くごとく、共有点も差異点も「意味」である。ここにおいて、「ムスコ」と「ムスメ」は、ともに「ムス」という共通の音形を有するが、それが、語彙体系を支える客観的な根拠には何らなり得ないと考えるためか、著者はこの点にはひとことも触れようとしない。「音形」は、基本的には「意味」の記憶や伝達のために張り付けられたラベルであって、これが、語彙体系論においてはたしてどの程度の有効性を持つものか、疑わしい。

この「音形」重視の思想が、一方で、意味体系の軽視となって現れている。まさに、紙

の裏表の関係である。そのことは、概念と意味、概念体系と意味体系とは明確に異なるものであることを何度も繰り返して説く著者が、本書のどこを見ても、「意味」については定義らしい定義を行っていないことである（ちなみに、「概念」については明確な定義を示している）。「語の『音形』と結び付いているのは、ソシュールがいうのとは違って、概念（concept）ではなく、意味（語義）だと考えている。」（p.56）という説明（ただし、p.120においては、「明らかにソシュールにおいては、概念と意味の区別がない。」とする、先の引用とはやや紛らわしい説明が見られる）などから、著者の意味に対する考え方を汲み取らなければならない。そのために、たとえば、東京語の身体名称のうち、人間の顔面とそこにあるものを表す語を挙げ、そこに観察される注目すべき特徴の最後に、「④意味の一部を共有する語がある。メとハナ」という説明などが、ひどく分かりにくいものとなっている。おそらく、「メハナダチ」という複合語が容貌を意味するということや、「メガ キク」「ハナガ キク」といった同一の語との呼応が認められることを押さえて、「意味の一部を共有する」と言っているものと思われる。そのためには、著者が意味というものをどのように考えており、どういう方法で分析すればよいかを類義語、対義語の場合に限った一般的説明で終えるのではなく、もっと広く具体的に示す必要があると考える。また、著者は、語彙体系の特色を「言語外の社会や生活から総合的に説明する」（p.267）ことや、「言語学は、（中略）その言語を使用する人々の思考——大げさにいえば、その世界観——を明らかにすることにつながる。」という問題の重要性には触れているものの、注意深くそこへは深入りしようとはしない。ここに、著者の学的な潔癖さを見る思いがする。しかし、語彙体系と人間の思考・認識の問題は、古くから論じられてきた問題であって、概念とも関係してくる問題であるだけに、まとまった形で論じて欲しかったという思いが強い。精神や認識の営みは、「語彙体系」の仕組みと働きに最も典型的に現れていると考えることも出来るからである。

すでに触れたごとく、著者は、「概念」と「意味」とをきわめて厳密に区別する立場をとる。『「概念」は、個々のものごと（現実体、あるいは指示物 referent）を一つにまとめた概念である。ここで、『「概念」とことばの『意味』とを区別するということは、現実のものごとと言語記号との間に『概念』というものを置いて、両者の関係を説明しようとする立場をとることである。』（p.121）したがって、「語彙体系は、語の体系であって、概念や現実の事柄の体系ではない。』（p.166）ということになる。「概念は、・・・観念である」という定義は、類義語による言い換え以上に出ないと思われるが、「概念」と「意味」とを区別することには、評者も賛成である。「意味」の場合は、対象が表す概念そのものよりも、それをどのように捉えるかという共同主観的な様式が重要になってくると思うからである。「宵の明星」と「明けの明星」は、概念はおなじだが意味は明確に異なる。また、著者は、「ウケトッテ クレル」「モラッテ クレル」というように二語を用いて表現する場合についても概念の存在を認める。これにも、評者は同感である。たとえば、「ウソヲ ツク ヒト」というように、二語以上の連結体における概念の一体化（凝縮化）の要求が強まって、「ウソツキ」という言語記号が生産されるという場合が多いからである。それでは、「冷たさ」

と「冷たい」のように品詞（音形）は異なるが意味を大きく共有するような場合も、著者は、当然、「概念」は同一であると考えられるものと思われるが、この点については触れるところがない。また、p. 128 に挙がっている平良方言の「病気語彙体系」のうち、「そこからわかる病気が否か」は、先に著者が否定した現実の事柄であり、「症状」は明らかに「概念」だと考えられる。語彙体系そのものと、語彙体系の枠組みを規定する条件との違いについてもひとこと言及しておく必要がありはしなかったか。

さて、概念体系と語彙体系との関係だが、著者が概念体系の典型として挙げる国立国語研究所『分類語彙表』（1969、秀英出版）と「言語使用者の生活から生まれた語彙体系とは当然くい違ふ」とする考え方には、評者も全く同感である。ただ、『分類語彙表』を比較対照研究のための素材としてのみ扱い、方言語彙の研究を「それとはもう一つの別の方向の研究」として位置づけていることには、評者はにわかには賛同しかねる。著者は、語彙は要素の数があまりにも多いから部分体系に分けて扱うほかかないとして、たとえば、「親族名称・空間語彙・地名・風名・潮流語彙・時間語彙・生涯語彙（通過儀礼語彙）・食事語彙・色彩名・指示詞（コソアド）・授受動詞・身体名称・病名・農業語彙・漁業語彙・年中行事語彙・植物語彙・動物語彙など」（p. 118）を挙げているが、この一々の部分体系は、概念の枠組みから切り出されてくるものであって、ある特定の方言とだけ関係するようなものではない。評者は、方言語彙の調査研究を進める際、概念体系から出発し、調査を繰り返す中でそれに徹底的な修正を加え、その土地固有の語彙体系を帰納するという方法が有効であり、実際問題としてそうするよりほか方法がないと考えている。それは、結局、概念体系から出発し、種々の改変を行うことによって、最終的には、その土地固有の「民衆分類」を明らかにする、換言すれば、その方言に生きる人々の認知体系が反映するような語彙体系を帰納するという方法である。このように考えることが許されるならば、概念体系とその土地固有の語彙体系の帰納とを、全く別方向のものとして峻別する必要はないように思われる。このような方法は、認識人類学においても早くから試みられており、「エスノ・セマンティックス」の確立や認識心理学などとのからみにおいて、ますます深化の一途をたどっているようである。

要素の量が膨大な語彙について、体系を見出す現実的な方法として、部分体系に分けて考えていくことが重要だとする著者の主張には、評者も賛成である。その際、「体系というものは、全体がわからなくては組み立てようがない。」（p. 114）というように「網羅・悉皆主義」に徹するか、それとも、著者が後の箇所述べているように、「体系は、いわばことからの枠組みである。枠組みは、もちろん全部尽くすのに越したことはないけれども、必ずしも全部尽くさなければならぬというものではない。枠組みさえ得られれば、そして、それが妥当なものであれば、記述に残されたものがいくつか出て来ても、枠組みの中の要素をふやすだけのことである。」（p. 142、143）のように「枠組み主義」でいかかという問題が生じる。評者は、この後者の考え方に賛成である。なぜならば、著者も言うように、「いつまで記述を続ければいいのか」という客観的な保証がないことと、語彙の全分野にわたってすべての要素を尽くすためには、その土地の生活全般にわたって、きわめて詳細な

知識が、調査者の側になければならないからである。しかも、調査を続けていくうちに、語彙が変容していくということもある。さらに、語彙の個人差の問題を考えるならば、「枠組みさえ得られれば、そして、それが妥当なものであれば」よいという考え方で、実践を進めていかざるを得ないであろう。

著者は、また、本書の中で、語彙の個人差の問題を取り上げ、語彙体系論の立場から、いかなる方法でこの難問を克服すればよいか、深い考察を展開している。そうして、「人名・地名語彙のことを考えると、語彙の体系的記述は、個人語から始めざるをえないように思われる。一個人の語彙ならば、体系があると仮定しての研究も意味がある。」という実践の立場からの方法を示している。これに続けて、著者は、さらに次のようにも述べている。「個人語を記述するがぎり、個人の片寄りは避けられないが、片寄りがあるから個人語の研究が無意味だということにはならないと思う。片寄りは、いわば個人の個性である。その個性的な語彙のなかに体系が認められるはずである。」(p. 148) この説明を読んでいると、語彙の体系的な研究が、ラングのレベルではなく、ラングとパロールの中間レベルにおいて問題にされているような錯覚におちいる。著者は、体系を抽象化、一般化という操作を経たレベルにおいてしか認めなかったのではないのか。もし、個人の個性的な語彙の中に体系を認めるとするならば、それは、コミュニティの語彙体系とは言えず、音韻や文法に関してはコミュニティが認められるが、語彙については最初からコミュニティを否定するという議論になりかねない。しかも、「人名・地名」語彙のような固有名詞を取り上げて、語彙の個人差を問題にすることが適切であるかどうかとも疑われる。なぜなら、固有名詞がその指示機能を明確に果たし得るのは、最初から比較的戸数の少ない特定のコミュニティに限られていることが明白だからである。それにも関わらず、著者はある特定社会の人名語彙だけでなく、個人が有する「全国、全世界、はては小説のヒロインの名も含めて考え」(p. 147) ようとしている。これでは、最初からコミュニティの語彙体系を否定してかかっているという印象を読者に与えかねない(ただし、p. 119 においては、「地域社会の語彙体系をつかむのにも個人言語から出発すべきだということである。」)として、柔軟な考え方を示している。「体系」が「ことからの枠組み」であればよいと考える著者が、語彙の個人差を超えて、「地域社会の語彙体系を組み立てる理論も方法もいまのところ持ち合わせていない」(p. 149) ことによって、「ラングという仮構の有効性」さえも疑ってかかるということになると、これは明らかに論理の飛躍である。「ラングの仮構の有効性」を疑うということとは、言語の体系性を疑うということにほかならない。

今日、どの地域社会でも、程度の差こそあれ、音韻・文法、さらにはアクセントにおいても、個人差の認められることは、著者自身、最もよく知っているところであろう。語彙の個人差が大きいのは、語彙を構成する要素の量が他を圧して多いことと、個々人の生活経験の差異に関わることが大きいからである。評者は、地域社会の語彙体系を組み立てる方法としては、個人差が少ないと予想される部分体系から始めて、その一つについて個人 A の語彙、個人 B の語彙・・・個人 N の語彙とから、大半重なる部分を捉えてそれをラングとして認め、ほとんど重ならない部分を一つの個人特有語彙と考えて、別に処理するほ

かないと考えている。コミュニティとして認められる部分と認められない部分との併存は、音韻・文法においても指摘し得ることである。いずれにしても、語彙の個人差が、「体系の枠組み」という上位レベルにおいて認められるのか、それとも細部において認められるのか、また、それはどの程度の量的差異を示すのか、また、部分体系によってどのようなゆれが認められるのか、それらの問題を明らかにすることの方が先決であろう。「ラングの仮構の有効性」を疑うのは、それからのことではなからうか。

以上、本書に通底して認められる「語彙論の方法」に関して、評者が特に重要だと判断した問題に限定して、著者の説くところに耳を傾けつつ、愚見を記してきた。とんでもないのはずれの問題を取り上げていなければ幸いである。

以下には、評者が強い共感を覚えた部分、また、今後、語彙体系を考えていく場合、きわめて重要な示唆を含むものとして受け止めるべき点について記してみたい。著者は、p. 151 から 152 にかけて、「現実の事物に関する知識が乏しいと、聞き出せる語彙の量が不思議と少ないものようである。また、組み立てた語彙体系は、それと対応する、または関連する、言語外のものとの体系と比較する必要がある。(中略)語彙体系の説明には言語外の体系的情報が必要となるのである。」と述べている。最初に、いかにも他人ごとのようにさらりと記されている感想めいた発言は、著者がいままで実践してきた方言語彙の調査研究の深さを、逆に強く印象づけるものであり、評者も常に身につまされていることである。また、語彙体系について、それを、帰納する段階から説明する段階にまで引き上げ、語彙体系と言語外の体系的情報との関連性を強調している点は、評者も、全く同感である。ただ、言語外の体系的情報の中に、どのようなものが具体的に含まれ、それらがいかに価値づけられるかという点について、著者の考えを知りたいところである。

沖縄宮古島方言の語彙体系については、全部で 12 の部分体系が取り上げられ、個人語彙を中心とした、生きのよい語彙体系論の実践となっている。概念体系から出発して意味と音形に基づいて語彙体系を帰納し、個人差を明らかにしつつその理由を解明し、ときに語の新古関係、古い語彙体系から新しい語彙体系への変容も分かりやすく述べられており、さらに民衆語源の重要性にも説き及ぶ。また、事物に対する土地人の認識の問題も、部分的にはあるが取り上げられている。これらの実践を通して、おのずから宮古島に生きる人々の生活世界の特色を理解させてくれる記述になっている。このような実践が、現在まで皆無だったわけではないが、部分体系の多さ、視点の多様性、徹底した調査に基づく語彙体系の解明など、教えられるところが多い。語彙は、それが話されている社会にのみ共通な、固有の生活経験の認識指標とその構造化であり、それ故に、一つの世界像の具象でもある。著者の、このような試みを、本土方言のどこかで同じ精度をもって実践し、各部分体系についての比較研究が行われることが望ましい。それは、おそらく、我々の想像を超えた多くの興味ある事実や規則を明らかにしてくれるに相違ない。

最後に、今後の語彙研究にとっても、重要な課題となると考えられる著者の言を以下に引用する。「現実の言語は、空間的な構造を持ちつつ、時間的に変化するようなものである。したがって、言語は、単に時間的なものでもなく、単に空間的なものでもなく、まさに時

間・空間的（通時・共時的）なものである。発達心理学のピアジェは、構造を単に静的なものとは考えず、もっと動的（dynamic）なものと考えている。構造主義というよりは『構成主義』というべきものだといわれる。（中略）言語についても同様で、構造を動的なものとするべきだと思う。」（p.27）このことは、語彙体系についても、当然考えられなければならない問題であろう。おそらく、著者には、「生成語彙論」（構成語彙論）とでも呼ぶべきものが、部分的には確立することが可能であるという見通しがあるのであろう。

以上、本書の内容を紹介し、一二卑見を述べてきた。「語彙論の方法」に関して、深い思索を縦横に展開する14篇の論文が収録された記念すべき本書に対して、わずか20余枚の書評においては、意を尽くさぬ点があまりにも多く、評者の誤解や読みの浅さなどによる過ちも、また多いであろう。著者ならびに本書出版の世話人の方々の寛恕が得られれば幸いである。

（昭和63年7月10日発行 三省堂刊 A5判 392ページ 5,800円）

——広島大学助教授——

（平成元年6月1日 受理）